

助産師が救急救命士学生に行う病院前周産期ケア授業の検討

井上ちはる¹, 岩崎千歳², 井上理絵², 蚊口理恵², 嶋澤恭子², 高田昌代²

¹産業医科大学, ²神戸市看護大学

キーワード: 救急救命士, 教育, 助産師, 病院前周産期ケア, 授業

A study of pre-hospital perinatal care classes given by midwives to paramedic students

Chiharu Inoue¹, Chitose Iwasaki², Rie Inoue², Rie Kaguchi²,
Kyoko Shimazawa², Masayo Takada²

¹University of Occupational and Environmental Health, ²Kobe City College of Nursing

Key Words: Paramedic, Education, Midwife, Pre-hospital perinatal care, Classes

要 旨

本研究の目的は、助産師が行う病院前周産期ケア受講による救急救命士学生の意識変化を明らかにし、今後の授業構成の資料とすることである。

対象は、A県内の救急救命士養成課程の学生 50 名 (以下学生とする) であり、授業前と後に無記名自記式質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、母子の救助活動に対する自信度、今後の周産期救急活動に役立つ内容であったか、学んでよかった内容等であり、4 段階のリッカートスケールと自由記載にて回答を得た。

授業は、病院前周産期ケアをイメージできるよう、「絵や写真を用いた資料」「分娩映像の視聴」「救急車内を想定した分娩介助演習」といった工夫を行い、授業全体を通して、母子の救急対応時の情緒的支援や愛着形成の重要性を伝えていった。

質問紙調査の結果、学生の救急隊員での分娩立ち会い経験は、10 名 (25.64%) であった。授業後は、母子の救助活動に対する自信度が、授業前より有意に高まっていた ($P < 0.001$)。自信度が上昇する一方で、施設外分娩の症例は稀であるため、自信がないという学生もいた。学生が役に立つ内容と考えたのは、【救急現場を想定した分娩介助】【正常妊娠・分娩の対応と役割】【異常時の対応】【疑問と実状との統合】であり、安全を中心とした内容であった。学んで良かった内容は、【分娩を中心とした母子の対応】【母子の持つ力】【母親の心のケア】【救急救命士への要望】であり、安楽についての内容を含んでいた。

施設外分娩を余儀なくされた女性にとって、安全のための技術と同様に、安楽のための情緒的支援も重要である。そのため、妊娠褥婦・新生児の安全に加えて、安楽のためのケアを取り入れた授業としていく必要がある。今後、授業を構成にあたり、リアルに施設外分娩を疑似体験し、安全・安楽なケアが習得できるよう、助産師と救急救命士養成所の教員が協働してシミュレーション設計をすることが望ましいと考える。

I. 緒言

現在わが国の周産期医療の現状として、出生数の減少、分娩に携わる医師の不足などにより、施設の閉鎖や分娩取り扱い中止が生じている。このことにより、分娩取り扱い施設は減少し続けており、今後も続くことが予想される。この分娩取り扱い施設減少の影響として、妊娠褥婦の分娩施設へのアクセスの悪化が懸念されている (厚生労働省, 2016)。妊娠褥婦は、住み慣れた地域で分娩できる施設がないため、分娩時に長距離の移動を余儀なくされるケースや分娩施設での出産が間に合わず、自宅や車中など分娩医療機関以外での分娩 (以下施設外分娩とする) が増えてくることが予測される。施設外分娩のケ-

スでは、救急要請を受けた救急救命士が分娩の対応にあたる。救急振興財団の報告によると、2015 年は 891 例の分娩を救急救命士が対応しており、その内訳は、既に娩出されていた 74.1%、救急車内分娩 14.9%、到着現場での立ち合い 9.2%であった (宮園ら, 2017)。施設外分娩に対応する救急救命士は、分娩に携わる専門職がない状況下で、切迫した分娩に直接対応し、母体と新生児両方に必要なケアを提供していく必要がある。

本学のウイメンズヘルス看護・助産学分野では、平成 30 年より救急救命士養成課程から依頼を受け、救急救命士学生 (以下学生とする) に対して、分娩介助を含む病院前周産期ケアの授業を実施してきた。助産師が授業を行うことにより、リアリティーのある分娩状況を伝えることが

でき、施設外分娩などの病院前周産期ケアの正確な知識・技術の習得につながる。さらに、助産師が妊産褥婦の思いを代弁することにより、情緒的支援や出産を肯定的に捉えることの重要性を学生が理解することができる。これらのことは、施設外分娩を余儀なくされた女性の、安全な出産や肯定感情の高まりにつながると考えられ、出産満足度の上昇、愛着形成の促進、産後うつ発症率低下（有本ら、2010）をもたらすと考える。

本研究は、助産師が行った病院前周産期ケア授業による救急救命士学生の意識の変化を明らかにし、今後の授業内容・方法を構成する際の資料とすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 用語の定義

1) 病院前周産期ケア：分娩取扱い可能な産科施設に到着する前に、分娩が進行、または、墜落産に至る状態にある妊産婦、および出産直後の褥婦と新生児に対するケア。

2. 対象者

A県立消防学校救急救命士養成課程の学生 50 名。対象の救急救命士養成課程の入校資格として、「消防学校における救急に関する講習【救急科（250 時間）】を修了し、5 年又は 2000 時間以上救急業務に従事した消防職員」と掲げており、学生は全員この資格に該当する者である。

3. データ収集期間

2020 年 12 月～2021 年 2 月

4. 調査方法

1) 質問紙

質問紙調査は、授業の 1 ヶ月前と授業後に対象学生に配布し実施した。なお、質問紙を配布した対象学生 50 名は、授業の前後ともに同じ学生である。

質問紙の内容は以下に示す。

(1) 対象の基本属性

年齢、救急隊員の経験年数、勤務中に分娩に立ち会った経験の有無であった。

(2) 授業前

妊産褥婦の対応についての関心の程度、新生児の

対応についての関心の程度、母子の救助活動に対する自信の程度について、「強くある:4 点」～「ない:1 点」の 4 段階のリッカートスケールにて尋ね、この項目の考えを自由記載で求めた。また、受講する前の学生の思いや受講に対する期待を授業計画に反映するため、出産に対するイメージや思い、授業で学びたいこと期待することを自由記載で記入を求めた。

(3) 授業後

妊産褥婦の対応についての関心の程度、新生児の対応についての関心の程度、母子の救助活動に対する自信の程度、妊産褥婦の救急活動に役立つ内容であったか、新生児の救急活動に役立つ内容であったかについて、「強くある・強く思う:4 点」～「ない・思わない:1 点」の 4 段階のリッカートスケールにて尋ね、その理由と授業で学ぶことができてよかったことについて自由記載で記入を求めた。

2) 授業の概要

救急救命士養成課程より依頼を受けた授業は、救急救命士養成所指導要領で定める、専門分野の疾病救急医学（5 単位）の一部である。目的は、救急現場における分娩介助を含む産科救急の対応を理解し、適切な活動を実施できる救急救命士の育成であり、1 日（講義 3 時間、演習 4 時間）で行った。目標を産科救急における母子の観察・処置を理解する、分娩介助の手技を習得する、施設外分娩における母子の愛着形成について理解するとした。

授業のスケジュールの構成、進め方を表 1 に示す。授業を担当したのは、助産師 3 名である。午前中に行った講義は、妊娠期、分娩期、産褥・新生児期と分類し、経過に沿った講義内容とした。救急搬送される妊産褥婦や新生児は、正常な経過をたどる過程で、何らかの異常に見舞われたケースである。そのため、まずは、正常経過を説明した後に、異常を見極める観察ポイントや対処・配慮について説明した。さらに、学生のほとんどが 20～30 歳代の男性であり、分娩を見た経験がないこと、授業前の質問紙において、イメージ化できる方法で学びたいという意見があったことから、絵や写真を用いた授業資料の作成や分娩映像の視聴など、イメージ化を図る工夫をした。午後からの演習は、限られたスペースと物品しかない救急車内を想定し、ストレッチャーの上で、救急車に設置してある分娩セットを用い、分娩介助を行った。はじめに助産師

3名でデモンストレーションを実施し、その後学生の演習を行った。学生は3グループ編成とし、各グループに助産師1名を配置した。演習中も、スクリーンに分娩映像を流し、分娩の様子や介助手技を確認できるようにした。授業全体を通して、母子の救急対応時の情緒的支援が愛着形成を促進することやその重要性を学生に伝えていった。

3) 分析方法

対象の属性、妊産褥婦の対応についての関心の程度、新生児の対応についての関心の程度、母子の救助活動に対する自信の程度、妊産褥婦の救急活動に役立つ内容であったか、新生児の救急活動に役立つ内容であったかについて、単純集計を行った。また、授業前後でWilcoxonの順位和検定を行い比較した。分析は、統計ソフトEZRを用い、有意水準は5%未満とした。

授業後質問紙の自由記載である「今後の母子の救急活動に役立つ内容であったか」「学ぶことができてよかったこと」について、記述内容を精読し、内容ごとに整理しコード化した。その後、内容の類似性に基づき帰納的に分析を進め、サブカテゴリー化からカテゴリー化した。分析過程においては、質的研究の経験のある複数の研究者との検討を経て、分析の厳密性の確保に努めた。

4) 倫理的配慮

本研究の対象者には、研究目的と意義、匿名性の確保、参加の自由、データの管理、研究結果の公表について、研究協力依頼文書を用いて説明した。そして、A県立消防学校救急救命士養成課程の責任者に対して、調査依頼書を用いて研究の趣旨を説明した。その後、本研究の対象者には、研究協力依頼文書を用い、研究目的と意義、匿名性の確保、参加の自由、データの管理、研究結果の公表について説明した。質問紙、返信用封筒を渡し、郵送による返信をもって承諾の意思とした。なお、本研究は、神戸市看護大学の倫理委員会の承認を受け（第201008-12号）実施した。

IV. 結果

授業当日の欠席者はなく、質問紙の配布は授業前後ともに50名に配布し、郵送での回収を行った。その結果、授業前は39名（回収率78.00%）、授業後は38名（回収率76.00%）からの回答を得た。

1. 対象の属性

対象の年齢は、20歳代と30歳代が90%以上とほとんど

表1. 病院前周産期ケアの授業スケジュール

時間	授業内容
9:00～9:10	10分 自己紹介・挨拶
9:10～10:00	50分 講義・演習の目的・目標・内容の説明
10:00～10:10	10分 妊娠期の正常経過と異常時の対応（講義）Power Point資料
10:10～11:15	65分 休憩
11:15～11:25	10分 分娩期の正常経過と分娩介助技術（講義）Power Point資料
11:25～12:00	35分 分娩映像の視聴
12:00～12:30	30分 休憩
12:30～13:30	60分 分娩期の異常と対応（講義）Power Point資料
13:30～14:00	30分 産褥・新生児期の正常経過と異常時の対応（講義）Power Point資料
14:00～14:50	50分 昼休憩
14:50～15:00	10分 分娩介助の実際（演習） 助産師によるデモンストレーション 救急者内を想定し、ストレッチャー上にて分娩介助
15:00～15:50	50分 学生演習① 1グループ（学生16名）：助産師A 2グループ（学生17名）：助産師B 3グループ（学生17名）：助産師C ・同時に分娩映像を放映し、映像でも分娩介助技術の確認ができるようにする ・全員がストレッチャー上での分娩介助技術を経験する ・その他、立位・側臥位など様々な分娩体位での分娩介助技術も経験する
15:50～16:00	10分 休憩
16:00～16:50	50分 学生演習② 演習①と同様
16:50～17:00	10分 学生演習③ 演習①と同様
	講評

どを占めており、救急隊員経験年数は、10年未満の者が80%を占めていた。また、勤務中に分娩に立ち会った割合は、10名(25.64%)であり、消防隊員として勤務する中で分娩に立ち会った経験を有していた。(表2)

2. 授業前後における意識の変化

質問紙の記入漏れを除外し、33名のデータを対象とした。授業前及び授業後における「妊産褥婦の対応についての関心の程度」「新生児の対応についての関心の程度」「母子の救助活動に対する自信の程度」の集計結果を表3に示す。「妊産褥婦の対応についての関心の程度」について、関心が強くある者は授業前が23名(69.70%)、後が17名(51.52%)、どちらかといえばある者は、前が9名(27.27%)、後が16名(48.48%)、どちらかといえばない者は、前が1名(3.03%)、後が0名(0.00%)、ない者は前後ともに0名(0.00%)であった。「新生児の対応についての関心の程度」について、関心が強くある者は前が25名(75.76%)、後が23名(69.70%)、どちらかといえばある者は、前が7名(21.21%)、後が9名(27.27%)、どちらかといえばない者は前が1名(3.03%)、後が1名(3.03%)、ない者は前後ともに0名(0.00%)であった。「母子の救助活動に対する自信の程度」につ

いて、自信が強くある者は前が0名(0.00%)、後が1名(3.03%)、どちらかといえばある者は、前が2名(6.06%)、後が16名(48.48%)、どちらかといえばない者は前が20名(60.61%)、後が15名(45.45%)、ない者は前が11名(33.33%)、後が1名(3.03%)であった。自信が「強くある:4点」～「ない:1点」として算出した中央値(四分位範囲)は、授業前は2(1-3)で、授業後は3(1-4)であり、有意差がみられた($P < 0.001$)。また、授業後において、自信が強くある・どちらかといえばある者の理由を要約すると、実技で一連の流れを体験し、イメージができたことや現場を想定した演習ができたこと、質疑応答を通して疑問が解決できたことなどが記載されていた。自信がどちらかといえばない・ない者は、演習と実際の現場や人形と人間ではちがうことや分娩での救急要請の経験が稀であることなどが記載されていた。

3. 授業後における学生の意識

授業後における「妊産褥婦の救急活動に役立つ内容であったか」の強く思う・どちらかといえば思う者は、33名(100%)であった。「新生児の救急活動に役立つ内容であったか」の強く思う・どちらかといえば思う者は32名(96.97%)であった。

表2. 対象の属性

		n=39	
		人数	%
年齢	20歳代	17	43.6
	30歳代	20	51.3
	40歳代	2	5.1
救急隊員 経験年数	5年未満	9	23.1
	5年以上10年未満	23	59.0
	10年以上	7	18.0
勤務中に分娩に 立ち会った経験	有	10	25.6
	無	29	74.4

表3. 授業前後における学生の意識の比較

		n=33				P値
		強くある 名(%)	どちらか といえばある 名(%)	どちらか といえばない 名(%)	ない 名(%)	
妊産褥婦の対応についての関心の程度	授業前	23(69.70)	9(27.27)	1(3.03)	0(0.00)	0.17
	授業後	17(51.52)	16(48.48)	0(0.00)	0(0.00)	
新生児の対応についての関心の程度	授業前	25(75.76)	7(21.21)	1(3.03)	0(0.00)	0.6
	授業後	23(69.70)	9(27.27)	1(3.03)	0(0.00)	
母子の救急活動に対する自信の程度	授業前	0(0.00)	2(6.06)	20(60.61)	11(33.33)	<0.001
	授業後	1(3.03)	16(48.48)	15(45.45)	1(3.03)	

Wilcoxonの順位和検定

今後の周産期救急活動に役立つ内容の自由記載欄には、34名の学生が記載をしていた。その記載データから、内容の類似性に基づき分析を行い、4のカテゴリー、10のサブカテゴリーが抽出された(表4)。以下【カテゴリー】、<サブカテゴリー>を示す。抽出されたカテゴリーは、【救急現場を想定した分娩介助】【正常妊娠・分娩の対応と役割】【異常時の対応】【疑問と実状との統合】であった。救急救命士学生は、<救急現場のイメージ化>をした<実技演習による分娩介助>を行い、【救急現場を想定した分娩介助】を習得できたことを役立つ内容であったと考えていた。<正常妊娠・分娩の経過>における<観察内容と方法>や<出生直後の新生児の対応>について学ぶとともに、救急救命士には<赤ちゃんが産まれる補助>

的役割があることを知り、【正常妊娠・分娩の対応と役割】を学んだことが役に立つと考えていた。正常時だけではなく、異常な妊娠・分娩にも対応できるよう、<異常経過の知識>や<異常時の対処>を学び、【異常時の対応】についての学びを役に立つと考えていた。授業において、助産師への<質問による疑問の解決>や<対応の実際>を聞くことで【疑問と実状との統合】ができたことが役立つ内容であったと考えていた。

学ぶことができよかった内容についての自由記載欄には、32名の学生が記載をしていた。その記載データから、内容の類似性に基づき分析を行い、5のカテゴリーと8のサブカテゴリーが抽出された(表5)。抽出されたカテゴリーは、【分娩を中心とした母子の対応】【母子の持つ力】【母

表4. 今後の周産期救急活動に役立つ内容

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
救急現場を想定した分娩介助	救急現場のイメージ化	現場でできる要領を学んだ、シミュレーションを行って、イメージが付きやすかった、現場でのイメージができたこと、救急車内での分娩の実技、救急車内での分娩、救急車内や現場想定シミュレーション
	実技演習による分娩介助	出産の演習が役に立った、分娩介助についての実習訓練、実際に手を動かして体験すること、実習ができてよかった、実技ができてよかった、基本の手技や必要性の説明、実習を通して、一定のスキルが身についた
正常妊娠・分娩の経過と役割	正常妊娠・分娩の経過	胎児がどのように生まれてくるのかを知ることができた、生まれてくる最中はかなりチアノーゼ様の体色をしていることを動画を通して知った、正常な妊娠・分娩について学習できた、妊娠中の体と心変化
	観察内容と方法	観察や処置について系統立てて学ぶことができた、観察要領、アプガースコアの確認方法、新生児期のバイタル
	出生直後の新生児の対応	新生児への対応、カンガルーケアの大切さ、保温の重要性、羊水は無理に吸引しなくても自然にでていくくれる事、新生児の対応について、出生直後の児への刺激の与え方、落ちないように気を付けてたらOK
異常時の対応	赤ちゃんが産まれる補助	赤ちゃんをでてくるまでまつだけでOK、赤ちゃんの産まれてくる力を補助する役割をできればいい、お母さんの手助けするように活動できればいい
	異常経過の知識	具体的なリスクを明示して頂きわかりやすかった、妊婦には、どのような疾患が起こり得るのか、異常な妊娠・分娩について学習できた
	異常時の対処	緊急時の対応、イレギュラーな時の対応、出血管理について、もしものことがあった時の対処法、周産期対応について学ぶことができてよかった、妊婦さんの対応、妊婦に対する処置
疑問と実状との統合	質問による疑問の解決	質疑応答の時間、様々な質問をさせていただいたこと
	対応の実際	現場の実状を知ることができたこと、妊婦対応のリアルな部分も学べた、助産師の方々の生の声を知ることができたこと

表5. 学ぶことができよかった内容

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
分娩を中心とした母子の対応	異常時の対応	妊娠特有の疾患、イレギュラーな対応、急変時、異常分娩時の対応、異常分娩
	救急現場を想定した演習	出産の現場対応方法、現場でできる手技、救急車内での分娩介助のシミュレーション、現場での活動の流れや処置
	分娩介助手技	分娩の際の処置、胎盤の触り方、分娩介助の方法(2)、分娩介助(4)、出産の介助を実施、分娩対応について、分娩介助全般、出産の映像、分娩介助の手技
母親の心のケア	新生児の対応	産まれてきた新生児の対応、新生児の対応について、産まれたあとの処置、アプガースコア
	母親への心理的配慮	母子のことへの思いやりに欠けていたことに気づいた、母親の不安に対して、ポジティブに接することが大切であること、急な出産が失敗だと思わせないよう配慮すること、妊婦さんへの声かけ、切迫した現場であっても赤ちゃんが産まれた際には、ねぎらいの言葉や祝福の言葉を忘れない
母子の持つ力	生まれてくる力	赤ちゃんがゆっくりながらも自分で回転しながら出てきて、その後元気に泣いている姿、子が出てくる力がある、介助者が引っ張り出すようなことをする必要がない、「生まれる力」が新生児に備わっている
	産みだす力	母子の生きる力、母は産む力がある、「産む力」が妊婦に備わっている
救急救命士への要望	実体験からの要望	実際の体験等話していただき有意義でした、救命士に求めていること、病院到着時・到着前に欲しい情報

親の心のケア】【救急救命士への要望】であった。救急救命士学生は、＜救急現場を想定した演習＞を通して、正常なく分娩介助手技＞＜新生児の対応＞や＜異常時の対応＞を含む【分娩を中心とした母子の対応】を学んで良かったと考えていた。身体的な対処以外にも、赤ちゃんの＜生まれてくる力＞や母親の＜産み出す力＞という【母子の持つ力】について学んで良かったと感じていた。救急救命士が対応する施設外分娩では、＜母親への心理的配慮＞が必要であり、今回の授業を通し、【母親の心のケア】について学んで良かったと考えていた。また、【救急救命士への要望】を助産師の＜実体験から（の要望）＞聞き取ることができた事を、良かったと考えていた。

V. 考察

1. 病院前周産期ケア授業後の学生の意識

結果より、救急救命士学生は、授業を受ける前から妊産褥婦や新生児の対応について関心が高く、授業後も変わらなかったことがわかった。対象学生は、全員が救急隊員としての経験があり、活動中に分娩に遭遇した者もいる。病院前周産期ケアは、専門性が高い上に、症例数が少なく経験知を得ることが難しい。さらに、母と子の2つの命に同時に対応することが求められ、救急救命士は強い不安を感じていることが推測される。このことから、不測の事態に備え、より多くの知識・技術の習得をしたいという思いから、関心が高かったと考えられる。

母子の救助活動に対する自信度は、授業後の方が、有意に高まっていた。自信があると答えた学生は、その理由を、実技で一連の流れを体験し、イメージができたことや現場を想定した演習ができたことをあげていた。周産期症例に対する救急救命士の教育ニーズとして、奥平（2020）は、「遭遇する機会が少ないだけに活動場面が想像しにくく、学習教材として動画・映像を用いた搬送の流れがイメージできる教材を求めている」（p41）と述べている。今回の授業では、実際の分娩の映像に加え、絵や写真などを用いた視覚的教材を充実させた。そして、実際の救急車内を想定して、分娩から新生児ケアまでの一連の流れで演習を行った。このことにより、活動場面のイメージ化ができ、救急活動に対する自信の向上につながったと考える。これに加え、多くの分娩に立ち会ってきた助産師が、実体験を交えてリアルに分娩の実情を伝えたことも活動のイメージ化

を促進し、自信の向上に関連したと考える。

今後の周産期救急活動に役立つ授業内容について、【救急現場を想定した分娩介助】【正常妊娠・分娩の対応と役割】【異常時の対応】という、病院前周産期ケアの知識・技術に関する内容を、ほとんどの学生は役立つと考えていた。救急救命士は、救急救命士法により、医師の指示の下に、救急救命処置を行うことを業とする者とされており、搬送する傷病者の症状の著しい悪化防止や生命の危険を回避するための緊急処置を行うことが求められている（e-GOV ポータル）。このような救急救命士としての役割を養成所で学んでいる学生は、分娩介助や正常・異常の観察・対応といった、対象者の救命に関わる知識や技術の内容を役に立つと捉えたと考えられる。また、学生は、【疑問と実状との統合】も役立つ内容と考えていた。救急救命士は、他職種から提供された情報が、自らの救急活動に役に立つと認識している（作田ら, 2018）との報告がある。学生は、救急隊員としての活動経験の中で、救急現場では、疑問を解決しておくことが、その後の救命につながることを体験してきていると考える。そのため、助産師という専門職との質疑応答を通して、疑問が解決できたことや様々な情報を得たことが、今後の救急救命士としての活動に役立つと感じたと考えられる。

今回の授業において、学ぶことができて良かった内容として、【分娩を中心とした母子の対応】という、内容が一番多く、次いで【母子の持つ力】や【母親の心のケア】という内容が多かった。この結果から、学生は、知識・技術だけではなく、母子の能力や心のケアに関する内容を学んで良かったと考えていることがわかった。【母子の持つ力】については、分娩では、産婦が持つ産む力と胎児の生まれてくる力が発揮されること、そして、自然な経過に沿ってまっ（正岡ら, 2013）ことがケアであるという、新たな学びを得たため良かったと認識したと考える。また、今回の授業では、施設外分娩をする女性の思いや、女性が出産を肯定的に捉えるための【母親の心のケア】について考える機会となった。救急救命士は、救命処置が優先事項であるため、妊産褥婦の思いを知り、心理的ケアの重要性を改めて学んだことが新たな知識であり、学んで良かったと認識したと考える。今回の授業では、救急救命士として母子に関わる際に、安全のための技術に加えて、安楽のための情緒的支援についても考えて欲しいという助産師の願いも伝えていった。授業後に【母親の心のケア】を学ん

でよかったと学生が考えたことは、これらの助産師の願いが伝わったといえる。このことは、施設外分娩を余儀なくされた女性が、救急救命士による適切な心身のケアを受け、分娩を肯定的に捉えることにつながると考える。

2. 助産師による病院前周産期ケアの授業内容の検討

学生は、分娩介助や観察と対処という対象者の安全を守るための内容を役に立つ内容であると捉え、母子が持つ産む力や生まれる力、母親の心のケアという対象の安楽のための内容を学ぶことができてよかったと認識していた。施設外分娩において、救急救命士と母子は、双方ともに時間的・精神的に余裕がない状況にあり、安楽より安全が優先になることも考えられる。しかし、施設外分娩を経験した女性は、尊重されたケアを実感したときに救急隊員の能力を信頼し、また、肯定的な出産経験には、救急隊員の臨床能力に加え、共感などの対人スキルが関係している(Flanaganら, 2019)。そのため、女性の安全を守る臨床能力の向上も重要であるが、尊重するケアや対人スキルなど情緒的支援により安楽を導くケアも重要であると考えられる。今後も私たち助産師が、専門的立場から施設外分娩時の妊産褥婦と新生児の安全のための技術と同様に、安楽のための情緒的支援も重要であることを伝えていく必要があると考える。

授業後の質問紙において、母子の救助活動に対する自信が「どちらかといえばない」「ない」と答えた理由として、演習と実際の現場、人形と人間では違うことや分娩での救急要請の経験が稀であることなどがあった。周産期救急の症例は経験することが少ない症例であるため、経験者からの伝達や経験の積み重ねによる技術の習得が難しい。したがって、施設外分娩をリアルに疑似体験できるよう、妊産褥婦や新生児、そして、救急現場を設定することが必要であると考えられる。そのために、周産期ケアの専門家である助産師と救急現場での豊富な活動経験のある救急救命士養成所の教員とが協働し、シミュレーション設計をしていくことが望ましいと考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

今回の調査は、1教育機関を対象とした調査であり、サンプルサイズが小さく、一般化することは難しい。また、研究協力を得られた学生のみを対象としているため、意見の

偏りがある可能性があり、学生の意見を全て反映しているとはいえない。

VII. 結語

病院前周産期ケアの授業を受講し、学生の母子の救急活動に対する自信度は上昇したが、その一方で、施設外分娩の症例は稀であるため、自信がないという学生もいた。そのため、今後、リアルに施設外分娩を疑似体験できるよう、助産師と救急救命士養成所の教員が協働してシミュレーション設計をすることが望ましいと考える。また、学生が考える役に立つ授業内容は、分娩介助を中心とした対象の安全のためのケアであり、学んで良かった内容は、情緒的支援を中心とした安楽のためのケアであった。学生が学んだ安全・安楽なケアの内容は、施設外分娩をした女性の肯定感情を高めることが考えられ、今後も安全のためのケアに加えて、安楽のためのケアを取り入れた授業設計としていくことが望ましい。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました研究参加者の皆様、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

COI 申告

申告する基準を満たすものはなかった。

引用文献

- 有本梨花, 島田三恵子 (2010). 出産の満足度と母親の児に対する愛着との関連. 小児保健研究, 69 (6), 749 - 755.
- e-GOVポータル. <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=403AC0000000036>(検索月日2021年6月12日)
- Flanagan Belinda, Lord Bill, Reed Rachel et al (2019). Women's experience of unplanned out-of-hospital birth in paramedic care. BMC Emergency Medicine, 19, 54.
- 厚生労働省 (2016). 周産期医療体制のあり方に関する検討会: 意見の取りまとめ. 1-11. 2021年7月15日. <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai->

10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000145749.pdf.

正岡経子, 丸山知子, 松尾睦, 他 (2013). 女性の産む力を引き出す熟達助産師の経験知. 札幌保健科学雑誌, 2, 27-34.

宮園弥生, 新井順一, 村井文江, 他 (2017). 救急現場における周産期救急 わが国の実態調査と病院前周産期救急教育のあり方に関する検討. 1-64. 2021年7月15日. <http://fasd.jp/files/lib/3/701/201706090910578607.pdf>.

奥平寛奈 (2020). プレホスピタルで働く救急救命士の周産期症例に対する教育ニーズの調査. 日本周産期・新生児医学会誌, 56 (1), 37-42.

作田麻由美, 城丸瑞恵, 澄川真珠子 (2018). 北海道の特別豪雪地帯の救急医療に携わる救急救命士・医師・看護師間の情報共有～病院前から救急隊の引き揚げまでに行う情報共有の実際～. 日臨救急医会誌, 21, 560-571.